

八点

①注連飾いつもの釘の少し錆ぶ

柏尾のり子

最近、注連飾りをする家が減っているような気がします。特に、マンションでは本当に少ないのです。寂しいことです。我が家のドア先に、お正月飾りをかける為に十年以上前に打った小さな釘は、今年もその役目を果たしてくれました。

七点

ケーブルに禰宜乗り合わせ初詣

稲葉 幸

眺めているだけの大山嶺。今年こそは久しぶりに、「登りますから」と願掛けがてら、阿夫利神社本殿に行つて来ました。禰宜さんの出勤時間だったのでしようか、社中、話し乍ら、「今年の三が日は好天でしたので、人が出ました」とのこと。私、七歳時、初めて登山の時は、大人の男女は白装束でした。現在では、考えられません。

六点

①下校時の子等の口笛春隣

池田 弘子

句のままの情景ですが、日脚の伸びた下校時は、のんびりした雰囲気で、我家の前をふざけ乍ら帰って行きます。

五点

①寒の水飲み父おもふ母おもふ

佐渡谷秀一

街中に住み、口に出来る水といえば、水道水とミネラルウォーターぐらいである。歳時記に載る「若水」「寒の水」など巡り来る自然の中の厳肅な風景がすっかり薄れていることは淋しいことである。あえて、蛇口から透明なコップに注いだ水を口にしたとき、何故か昔の両親の起居が眼に浮かんでくるのは、真に不思議である。

寒椿落つるや感ひふつ切れし

佐渡谷秀一

寒椿は山茶花のように花片が一枚ずつ散っていく。然し、その落花を見て、感いがふつ切れたというのは如何にも禅の頓悟のようなもの言いである。この齢になっても数々の感いはあるもの、嘗てのように、決断に期限付きのものは殆どない。答えは出せなくてもいいのだという、ふつ切れ方に気がついたということである。

四点

④ ニュートリノ甚兵衛鮫の深ねむり

恩田 才美

大いなる人知の結集から導き出された素粒子の新たな発見は、生命、寿命を操作する領域にまで及んできたとか。しかし、地球には、億年単位でそのままの自然が悠然と生命を保ち続けている。生命を両極に置いて対話させてみた。

① 明け切らぬ運河のしじま梅早し

増田 守

所用で大阪を訪れた。掘割りが縦横に走る街である。過激な気温の変化を繰り返しながら、季節は春に向かっていく。早起きした旅の時空は、日常とは隔離された空間である。早梅の白さが目に飛び込んで来た。

① 城壁に弾痕まざと時雨くる

藤崎安紀子

昨年十一月に夫の実家のある鹿児島へ帰省した折、訪ねた城山での句です。島津藩の鶴丸城の城壁には、西南戦争で受けた無数の弾痕がはつきり見て取れました。西郷隆盛の胸中を思いやり感慨にふけっていると、とつぜんパラパラと雨が降って来ました。

① 安保理も制裁も無視遠き春

安中 忠夫

安全保障理事会は北朝鮮の核・ミサイル開発について、二〇〇六年以降四回に亘って制裁決議を採択させて来ましたが、北朝鮮のミサイル開発を阻止することは出来ませんでした。制裁強化のための決議に苦慮しているというニュースを取り上げ、世界情勢の春はまだだと思つて作句してみました。愚作に共感して頂きありがとうございます。

根深掘る鋏の音清しあかね雲

岩野ヤエ子

近くに住む妹が、土地を借りて野菜を作っています。ほうれん草、小松菜、蕪、ブロッコリーと種類は色々ですが、その中でも、葱は収穫までにかかりの期間を要することです。十月頃、極細かい種を蒔き、十センチほどになったら植え替えをし、翌年六月頃、二十センチほどで本植えをし、その後、三、四回高く土寄せをして冬に収穫するという大変、手間のかかるものです。葱を取りに行くときと誘われ、行きました。静かな夕方、鋏を、土に切るように入れると「サクッ、サクッ」と気持ちの良い音がして、土をはがすと葱が現れました。こんなにも丹精して世話して出来る作物。太陽と土の恵みに感謝し、丹精して世話をしている妹に感謝です。

木曾谷の風の溜まり場冬紅葉

増田 守

以前、木曾谷の旅行をしたときの風景である。一陣の風は冬紅葉を攫って行った。風が衰えたとき、冬紅葉は浮力を喪失する。冬紅葉はその場に墮ちて溜まる。風が勢いを無くしたところ、

風の溜まり場は、冬紅葉の溜まり場である。

娘来ぬの一言母の初日記

藤崎安紀子

九十六歳の母は、パーキンソン病で施設に入所しています。少し前までは好奇心が旺盛でいろいろな事にチャレンジしていたのですが、最近では、病状が進み、手も震えて字を書くのも大変です。楽しみは、娘が訪ねてくることだけの様子。毎年プレゼントする新しい日記帳に震える字でたった一行書かれた言葉に胸がつまりました。